

細身傘

能村 研三

ITによる連衆意識

夏籠にして休肝の日としたり

半夏生使はぬものが捨てられぬ

定刻の鐘楼下の蟻地獄

細身傘持ちて父の日出掛けをり

他人と多く交わらない生活様式が推奨されて五か月が経とうとしている。顔を合わせて一堂に会する句会が懐かしく思えるようになってきた。本来人間は他人と交わり、その中で成長していくもので、俳句会においても土俵を一つにして他人の句に触れ合うことで刺激され、自らの創作意欲へと繋がってきた。今は一堂に会しての句会が出来ないのでその代わりに紙上句会を行っているが、なんとも淋しいものだ。

そもそも文化というものは一人で築けるものでなく、他人との交流があつてこそ、輝くものになるのである。茶道家の千玄室は「日本の生活文化、礼儀などは人と交わる事によって学べるし豊かになる。相手がそこに居てこそ、その心を慮れるものである」と述べている。俳句もまた座の文学として興った。「日本独特の文芸形式である俳諧の本質は、人の和をもつて始まり、それをもつて終わる」は尾形仿「座の文学」の名

言である。

一方、先日歌舞伎の世界ではコロナ禍の逆境の中、最新技術を駆使して一部リモートによる歌舞伎が公演されるというニュースがあった。四百年の歴史のある歌舞伎にとっては画期的なことである。生の迫力といったものは感じられないだろうが、劇場で体験できない大迫力の場面などの演出ができるという。

「沖」でも長年の懸案であつたホームページが六月のはじめに開設された。私が考えた企画を長女的美緒が技術的にサポートしてくれた。ほぼ一か月で八百人近くの人が見て下さり、そのカウントで反響がよいことを喜んでいる。

また、同人の清水佑実子さんの発案でリモートによるZOOM懇談を始めた。岩手、富山、岐阜、静岡、九州など地方の方も参加いただき画面を通じて交流できることは楽しいことだ。

またまだコロナ禍の感染が心配される昨今、こうしたITを活用した方法で連衆の意識を高めていければよいと思っている。

茅花野の風を待たせて乗り換す

青時雨気随気儘な骨董屋

撰末社荒造りなる茅の輪かな

涼しかり料亭女将に書画の才

並びゐて日傘の幅の距離を置く

段取りのとはり竹皮脱ぎはじむ

能村 研三